# やまちゃんの

## 地図からコラム　1

　地図からコラムの書き手”やまちゃん”です。

　ある日あるときから、あるメールマガジンに地図をつなぎ手として、コラムを担当することになりましたといいながら、小咄というかエッセイというか得体の知れないものを掲載しました。

　これは、そのときの「地図からコラム」に多少の手を入れたものです。

　ところで、自分のことは分かっているようで、分からないものですが、自身では“シャイ”で、“小心者”で、それから、うーーんと？？しだいに分かるでしょう。年齢は、今でも少年の気持ちを維持していますが、脱脂粉乳の味を記憶している”やまちゃん”です。

目　　次

1.　「地図を求めて」(2002/10)
2.　「刑事ドラマの地図」(2002/11)
3.　「うんこやま」(2002/12)
4.　「初夢」(2003/1)
5.　「峠」2003/2
6.　「寝小便の朋」(2003/3)
7.　「住民票コード」
8.　「バス路線図」
9.　「２ＤＫで迷う」(2003/4)
10.　「地図と領土と紙幣」(2003/5)
11.　「『Cambridge』の地図」(2003/6)
12.　「九十九」(2003/7)
13.　「道の発達」(2003/8)
14.　「位置を知る」(2003/9)
15.　「沼と呼ばれたくない」(2003/10)
16.　「秘密の地図」(2003/11)
17.　「悪党どもが見る越前屋の地図」(2003/12)
18.　「地図の日向と風向き」(2004/1)
19.　「六本木ヒルズでは、迷って当たり前」
20.　「地図の“向き”」(2004/2)
21.　「道を尋ねられ易い人」
22.　「地図の読める人が国を良くする！」(2004/3)
23.　「地図と花とシーボルト」
24.　「匂いの地図」
25.　「東京でも、無人島でも使える地図」

**「地図を求めて」**

自分で言うのも何だが、”やまちゃん”は、移り気である。

でも、大概の他人の評価は、「やまちゃんは、地図が好き」である。でも、でも、本人は「地図好きではない」と思っている。「地図を、仕事を愛している」だけである（それを地図好きというのかな）。

旅も好き、ドライブも好き、花も好き、書くことも好き…である。

そこで、今日は旅と地図の話？。

九州に住まいしてから一年と少し、萩へ、那覇へ、長崎へ、唐津へと訪ね歩いた。

仕事を愛している山ちゃんは、武家屋敷の町並を散策していても、居並ぶ焼き物屋の店先に目をやりながらも、市場に並べられたゴーヤの山を見ながらでも、仕事のことを忘れない。

萩の町並みのＵ字溝の蓋にあった町案内地図を、那覇の曲がりくねったアーケードのはるか上空にあった大きな「楽しいお買い物マップ」を、唐津城下にあった見事な焼き物の「唐津城下町絵図」を、そして太宰府の通りの中央にあったタイル状の「太宰府史跡めぐり」の心が温かくなるような地図をしっかり記憶にとどめている。

と書きながら、あらためて、旅人の心が温かくなる地図とはどんなものだろうと思いを巡らす。

“やまちゃん”は、旅と仕事が好きである。

**「刑事ドラマの地図」**

地図が好きの”やまちゃん”にとっては、それが不動産の広告だろうが、住宅街の案内図だろうが、「地図」という文字と「地図」が存在すれば全て興味の対象である。

そして、より多くの人に地図が利用され、理解されていることが確認されれば、「地図好き」の病人には何よりの薬である。

そのような生活を送っていると、テレビ番組も漠然と見ているわけにはいかない。ニュースやドラマが始まっても、ニュースに補助的に使用される「地図」、背景にある「地球儀」、トーク番組の本棚に積まれた「地図帳」などにも視点が移る。

こうした小道具は、番組の内容を補う役割のほか、デザインとしてあるいは設定に臨場感を持たせるものとして登場するのだろう。

どのようなものが、どのような場面で使用されるか、注意を払うことになり、「地図好き」には、番組が伝えたいとしているもの以上に奥深い観察が必要になる。突然、「本棚の上の地球儀が･･･」とか、「あ、一万分の一の地形図だ」とかドラマの筋道と関係のないことを口走って、つれ合いのひんしゅくを買うことになる。

そうしたなかで興味と疑問に思っていることに、「刑事ドラマの地図」がある。

ミステリードラマに登場する警察の大部屋の壁には、必ずといって良いほど「地図」が掛けられている。観察の範囲では、それらの地図は「地形図」が圧倒的に多い。「〇〇警察

署所轄管内図」とでもいったものが実在していても良いのだが、なかなかそうしたものにはお目にかかれない。小道具を配置する専門家は、より現実に近い再現をしようとして「地形図」を配置していると思われるから、実際に刑事が詰める事務室の壁には、常時何らかの「地形図」が貼られているとも思うのだがどうだろうか。

　残念ながら、「取調べ」を受ける機会に恵まれない”やまちゃん”は確たる証拠を持ち合わせていない。

「うんこやま」

若い読者には、寂しい綴りで申し訳ないが、50歳の峠を越えてしまうと、今の人生が70年だとしても、粗方のことは終わってしまった。残った人生は、これまでの蓄えを少しずつ引き出しながら過ごすことになる。

そんな、老人力でしか特徴を示すことができない”やまちゃん”に、たくさんの励ましメールが届いた。”やまちゃん”、ひたすら恐縮している。皆さんの期待に応えて、早々に収監され、刑事部屋に貼られた地図の確認を待ちわびる毎日である。

さて、今月のテーマは少々汚いのだが、中身は高尚に？

話は、北へ旅立つ雁の群のように、高学年の者が列の後先を行く集団登校の風景を５階の窓から眺めていた頃のことである。

住宅の階段下で整列し、平屋の工員社宅を抜けて、傍らに胡桃の木がある小さな橋をわたるのを見届けると、その列は私の視界から遠ざかる。その後、子らの列は、町屋裏の小さな空き地に繁る膝ほどの高さの雑草の中を横切ることが、ほんの少しの近道になっていた。そこには残土でできていたのだろうか、2から3mほどの高まりを持つ小山があった。

その山こそが、彼らの名峰“うんこやま”であった。

何のことはない、“うんこやま”の由来も、誰もが想像できる程度のことである。

子供にとっての記憶の地図には、“うんこ

やま”が通学路とともに書き込まれていき、立派に成長し、再訪したときに故郷を楽しくさせてくれるであろう。

山とは、地名とは、このようなことで人に知られ、伝えられていくものではないだろうか。時には曲げられ、忘れられそうになりながらも、あるものは地図に残される。たとえ、標高数メートルの山であっても、成人の脚でひとまたぎできる小川であっても。

例えとしては、ちょっと大げさではあるが、地名が「わらび沢」や「五郎山」なら読者も納得するであろう。

ともかく、”やまちゃん”は自然や人々の行動などに目移りする道草のできる道が好きだ。毎日に変化を求めない人生、そして脇目もふらずに目的物にだけ向かう、そんな人は嫌いだ。

**「初夢」**

「皆様、あけましておめでとうございます。そして、本年もよろしくおつきあい願います。」

さて、お正月といえば、今どきの小金持なら、海外旅行に出かけるのが定番でしょう。その次は、TDL や USJ などのテーマパークやスポーツ観戦、映画鑑賞？でも、年末年始は結構な連休となるから”やまちゃん”としてはたった一つのイベントでは間が持たない。

ある先輩は、1 日乗り放題の格安航空券で、東京→福岡→札幌→東京と乗り継いだと自慢していたが、目的地に行ってみたというだけで達成感は少ない。

この話を聞いたある後輩は、お正月に「三社参りをしたんですよ」と自慢げに切り出した。「自慢できるほどの三社参り？」と聞いてみると、なんと以下のようなものである。

羽田→新千歳　千歳神社 8:30（気温氷点下 1 度で猛吹雪）

新千歳→那覇　波之上宮 15:00（沖縄県内で最も初詣で賑わう神社。気温 18 度）

那覇→関西　春日神社 19:00（泉佐野市内の古い神社）

そして、関空から羽田に戻ったというから、上にはうえというか、変わり者はいるものである。

かく言う”やまちゃん”もその道では大いに変わり者で通っている。

その「地図好き」が思い描いた「初夢」をひとつ！

200X 年元旦。”やまちゃん”は、今年こそよい年であるようにと願いを込めて、富士山と鷹巣山（東京都）、那須岳の地図を枕元に眠りについた。

思い立って旅に出ることになった”やまちゃん”。京都・奈良へと向かった。

東海道新幹線は、他の各新幹線に比べるとトンネルも割と少なく風景が楽しめる。特に、遠くに見える風景と一体化し、窓にインポーズされた地図や解説が楽しい。今では、このシステムの拡張版は、飛行機にも取り入れられていて、特別シートに乗ると眼下の風景と飛行高度に連動した縮尺の地図とともに、季節ごとに変わる各地の食や祭りの解説が人気であるとか。

京に着いた“やまちゃんは”旅行会社の窓口で渡されたある器具を付ける。

このツールは、小型化され先ごろ発売された優れもので、注視しているところや、指差しているところに関連した観光地の情報を音声や映像として伝えてくれるから、ガイド本も必要ない（東大有川正俊助教授の研究から）。

また、旅行ガイドやグルメ本などに用意された観光地とレストランのジオコードを入力すれば、ルートガイドもお手のものである。高齢者向けや幼児向けといったものも用意されていて、しかも、GPS とその関連技術のおかげで、ビルの谷間や地下街だろうがＯＫである。

京では、超有名な嵐山下の「吉兆」で舌鼓を打ち、「俵屋」とかいうこれも由緒ありそうな宿に泊まり、翌日は奈良へ向かい古都と斑鳩を

散策した。
　さて、この間の行動はというと、先ごろの定期健診の際に、体のどこかに埋め込まれた IC チップのおかげで、くまなく家族に把握されているから安心である？（のだろうか）。
　そして、帰りの関西空港から飛行機では、もちろんスペシャルシートを利用し、風景と解説を楽しんだ”やまちゃん”、満足して家路についたのだが？
　複雑に交錯した各所の風景と不思議な呪文？にうなされて目が覚めた。

**「峠」**

もちろん、人生の峠の話ではない。

“やまちゃん”、地図の近くに永いこといるせいか、いろいろの質問を受けることになる。その中に、「峠とはどんなもので、日本にはいくつありますか」というものがあった。

「峠とは」と、あらためて考えて見る。

「馬の背、鞍の位置のような形の地形（鞍部という）の頂点」をいう。だから、「ＡＢ断面では、最も低いところ、それに直交するＣＤ断面では最も高いところ」になる。そして、「一般には人が山や丘を越える場所に限定して、このような地点を峠と呼ぶ」と答えることにした。

これでも、分かったような、分からないような、という人にはもう少し簡単に努力してみる。

「山道あるいは坂道の登り切ったところだが、両側により高いところがある、山頂ではないところ」。

これだけ読んで、馬の背を想像しても、まだ分からない人には、私には机上での説明不能ということであきらめていただいて、次ぎに進むことにする。

それにしても峠は無数にあるため、その数や最高点などの情報はない。また、正式な地図記号もないが、かつては小縮尺図で橋の記号を利用した地図もあったように記憶しているが、定かではない。

世の中には不思議な人がいるもので、「峠の会」を主宰しているという大島文二郎さんは、事件調書、裁判記録、旧地図から特定した峠を記録しているのだという。埼玉県、群馬県、長

野県だけで 574 の峠が確認され、今は 145 が地形図に記されているといい、大島さんは、そのうちの 350 カ所を訪問したのだという。

それにしても、「地名」「山名」「山の高さ」「古地図」等々地図を道具にした遊びは、数知れない。

そうした中でさきごろ、「三本の子午線ウオーキングする旅」という新聞広告が目に留まった。

三本の子午線とは、天文測量、日本測地系、世界測地系による、それぞれの東経 135 度だそうだが、地上にそれぞれの線が引かれているわけでもないから厄介だ。説明者の三本の子午線についてのうんちくに耳を傾けながら、日本測地系に従うモニュメントや天文測量と関連する施設と GPS で得られた東経 135 度を訪ねるのだろうか。ともかく、それらを縫うように瀬戸内海から日本海へ歩くこと 180km のウオーキングだそうな。子午線を楽しむのか、ウオーキングを楽しむのか、他人の楽しみとは、よく分からないものである。

かくいう”やまちゃん”も、こうした話の収集を楽しみにしているのはもちろんのこと、（測量）「標石で遊ぶ会」という、（測量とは縁の無い人ばかりの集まりだが）その道の人にしか理解できないものに関わっている。

**関連して質問をいただいた。

日本測地系、世界測地系は GPS で分かりますが、天文測量の子午線はそれらといくらずれているのですか」といもの。

話をごく簡単にしますが、天文測量での経度

は、グリニッジで 12 時に通過した星が、任意の地点で、グリニッジ時間の何時に真上を通過したかといったことで決まります。24 時間が 360 度ですからね（時間は角度でもあるんですよ）。

　ところが、この真上（鉛直線）というのが曲者で、地球の密度によって微妙に曲がってしまいます。日本経緯度原点での観測値（日本測地系の基準となった）は、天文測量によって決められたもので、このために 300m ほどの差が出てしまったことになります。

　天文測量の値は、地球の密度に依存しますから、各地で異なります。

**「寝小便の朋」**

“やまちゃん”あるときから飛ぶ夢を見続けてきた。そのことは他所で書いてきたから詳しいことは話さない（http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Namiki/2467/）。ただ、この年になって思うことは、飛ぶ夢の終わりは少年の終わりだということ。

それは、30 歳を過ぎるころであった。いや今となっては 40 歳を越えるころだと思いたい。

ともかく飛ぶ夢を見たこと、上空から地形を鳥瞰したことが地図とのかかわりの第二である。第一のかかわりはというと、寝小便で書いた地図である。

“やまちゃん”が、かなり高学年まで寝小便と親しかったということは、初告白である。少ないながら全国に散在する”やまちゃん”を慕う女性フアンを裏切らないためにも、そのことはずっと秘密裏にしてきた。

そのことを告白しようと思ったのは、「佐高信の政経外科」なる書と、一つの新聞記事がきっかけである。そこには、評論家である著者が、そしてあの弁護士の中坊公平が寝小便に悩まされた朋であったこと。それだけではない、坂本竜馬も勝新太郎も寝小便たれだったのだという。なぜか、いずれも一見強面である。佐高氏、中坊氏も評論や仕事の厳しさとは裏腹に、時折見せる笑みに独特の優しさを持っているような気がする。

そして、ある日の新聞記事に寝小便は、「本来、就寝中には排尿を抑える物質が働くのだが、

夜尿症の子らはそうした物質の動きが悪いのだという」。病気なのである。

そんな言葉に勇気づけられて、外見とは異なり優しい一面を持つ？”やまちゃん”は、このことを告白することにした。

地図への第三のかかわりは、職業軍人であった父が所持していた大東亜共栄圏が朱に塗られた地図である。”やまちゃん”この地図をタタミに腹ばいになり、いつまでも眺めていた。これらが、他愛も無い”やまちゃん”の地図とのかかわりである。

こうして、胸につかえていたものを吐き出し、すがすがしい気分に浸ったある日のこと。

今生のお別れかもしれない「飛ぶ夢」を見た。

地上からどのように舞い上がったのだろうか、少年時代のように段々畑の上から飛び降りたのではないようだ。ドラえもんのタケコプター のように平地から一気に飛び上がったようである。見下ろした先には、広い縁側を持つ古風な家があり、明るい日差しの窓越しに、なぜか上司が寝床を延べているのが見える。

こちらに気づいた彼は、顔を見上げて「そんなところで、何をしているのだー」。甲高い声が聞こえたような気がした。

“やまちゃん”、知らぬ存ぜぬで、周りの景色に目をやり空中散歩を続けたが、尿意をもよおして目覚めた。

ああー、今日が老人の始まり、幼児返りの始まりか。

「２ＤＫで迷う」

アリさんや、クマさん、ネコさんといったアルミバンのトラックが目につく季節になった。

“やまちゃん”も、かつて転勤族であった。

コイズミ君の故郷、神奈川県横須賀市で生まれてからこの方、北海道から九州まで 10 の都道県に住まいし、20 回ほどの引っ越しをした。文句も言わずについてきてくれた妻と子供たちには、その点では感謝しているのだが、転勤族であったことに悔いてもいる。

なぜかというと。

かなり前に成人した息子に突然襲いかかるか“鬱”。その遠因がここにあるからだ。そのことは、本コラムとは直接係わり無いから詳しく触れないが、若い父であった私は、転校に伴う子供の微妙な気持ちの変化を読み取ることができなかった。私の目では、すぐに打ち解ける柔軟な子供だと思っていたのだが、そこには大きな誤りがあったらしい。その時の生き様を引きずってのことである。

ともかく、”やまちゃん”は転勤族であった。

そして、転勤族は「２ＤＫで迷う」のである。

今時のマンションなら事情は違うのだが、そのころのしがないサラリーマンの社宅は、狭くて、どこまでも定型であった。

そんな社宅の中で迷うのだから不思議である。

お呼ばれして訪ねる、お向いさんの部屋でのことである。お隣さんの間取りは、階段を折り返し線とした折り紙のようなもので、我が家の裏返しである。と、頭では理解できている。

鏡を見ながら右のほっぺについた食べかすに、なかなか手が届かない類である。

記憶の中にある、“やまちゃんち”の２ＤＫとは、似てもにつかないものとなる。

いや、同じだが、ひっくり返っているから、迷うことになる。トイレへ行こうとして、こども部屋にいってしまう。

私たちは、行動範囲の地図をごく自然に頭脳の中に持っている。それを書き換えるには、外部からの新しい情報が必要になるのだが、お隣さんを訪ねたからといって地図を書いてもらう人はいない。

我が家の造りを元に、記憶の中にお隣さんの地図を描きなおす操作が必要になり、それに少々の時間を要することになる。

このとき、書き直しの自由度が低い人が方向音痴であると”やまちゃん”は思っている。

それはともかく、目の不自由な人々は、こうした操作を常から繰り返しながら行動していることになる。触地図などによる外部からの客観的な情報を得る機会は非常に少なく、提供されたとしても、それらのデータがメンテナンスされることも極端に少ないから、工事中による迂回や新しい段差は、経験する度に書き足し、描きなおさなければならないはずである。

となると、書き換えの自由度が低くては行動できないことになる。

いずれにしても、こうした弱者にこそ、よりメンテナンスされた触地図や地理情報を提供しなければならないのだが。私たちの地図作りの行動はどうだろうか。

**関連してご意見をいただいた。お詫びとともに本文の一部を訂正させていただいた。
といいますのは、「2DKで迷う」の内容について、三鷹市のY様から「目の不自由な人にも方向音痴な人は少なくありません。そういう人は決して一人では出歩けないので、家にこもりがちになるのです。コラムの趣旨は良いのですから、もう少し慎重に・・・。」というご指摘。
まったくY様のご意見のとおりである。言い訳がましいのですが、私も体の不自由な二人の姉がいる家庭で育ったこともあり、そうしたことには十分配慮し、理解していきたいと常から考えています。決して興味本位の発言ではないことをご理解いただきたいと思います。

**「住民票コード」**

“やまちゃん”は、北から流れてきた。その証拠に“乾燥耳”である。

ちなみに、南方系の人は、湿った“あめ耳”なのだそうな。

シベリアのそのまた北のエスキモーだろうか、モンゴル平原からだろうか、とにかく私の祖先は北方からこの地へやってきたのだと思っている。

それはさておき、東から西へ、北から南へと流木のように流れて、北海道から九州まで住まいした。

さて、誰しも同じだろうが、好きなことは繰り返し実行するから、趣味に関連した行動や知識に端のものは驚くことが多い。

こどもが、怪獣大辞典や“どらえもん”を擦り切れるまで読み、博識になることと同じだ。

ところが、”やまちゃん”のそれは、強制的なものだが確かに手馴れている。知識に溢れたものでもある。“それ”とは、引越し術だ。

両手の指では足りないほどの引越しを経験したから、引っ越しの準備・手順から、転居後の多くの始末まで何の苦痛もなく出来る。といっても、体力の落ちた今では、その事で旨くできないことが多くなった。それでも、書籍のためにはミカン用などの強固で持ち運び用の穴が開いた段ボールを集めることから始まって、すべてに抜かりがない。

各種の届け出だって、住民票コードなどなくてもスムースに出来る。”やまちゃん”は、その意味から住民基本台帳ネットに反対してい

る？

　ところが、”やまちゃん”の繰り返しは、他動的なものだが、知識も豊富で行動に隙がない。準備から始まって、各種の届け出、事後の整理と抜かりが無い。特に、横半分に切られ十文字に紐かけされたダンボールに救急箱のように、引越し用の消耗品を準備する手際のよさには、自分ながら感心する。

　この引越し救急箱の中身のことは、後に譲るとして、地図への見識は高いと思っている身としては悲しいのだが、引越しに関連して今でも不案内なのが、新しい土地でのバス路線のことである。（つづく）

**「バス路線図」**

新しい土地に引っ越してきても、道に迷うことは少なかった。

「少なかった」と過去形なのは、年のせいである。若かりし頃は、一目新しい地図を見て、ひとたび町の概略が頭に入れば、当面の行動に支障は無かった。ところが、その術も年とともに衰えたようである。

目的地周辺を周遊することが多くなり、永年連れ添った唯一の理解者にも、年だの、衰えただのと、ぶつぶついわれるほど信頼を低下させている。

そのような中で、自らも不案内であると認めるのが、見知らぬ町でのバス路線のことである。

少なくても鉄道なら、鉄道事業者が計画的に整備するから特にどうということはない。

ところが、バス路線はそうは行かない。交通需要との関係と効率的な輸送を考え、郊外の多方面から中心市街地にそして郊外へと向かうのだが、中心地では、複数系統が複雑に乗り入れることになる。

網状の路線は、無計画な都市計画で？作られた道路に依存するから性質が悪い。

自分が向かう目的地の地名は知っていても、その他の地名、それも読みまでは分からない新参者には、どのバスが目的地を目指すのかが分からない。そこで、バス停の系統図を見ることになるのだが、それでもよく分からない。路線図について良い地図表現といえるものが無いからだ。地図表現が難しいのも真実である。

勢い運転手さんに問いかけることになるの

だが、転居したての利用者側は住所をキーに話す、運ぶ側は停留所名で話したいから、これもかみ合わない。

　そこで、自分なりにバス路線図を見やすいものにしたいと試みた。複数の路線が交わる辺りは、ねじり飴のような表現にしてみたが、あまり良いアイデアとはいえない。転居者への便について考えると色表現だけではお手上げで、未だ解決策は発見できていない。

「地図と領土と紙幣」

“やまちゃん”は、かねがね幾枚もの切手で構成されるモザイクのような地図が、いやモザイクの地図でできた切手が発行されることを夢見ている。でもそれは、せめて切手であって、お札に日本地図や伊能図が印刷されたらなどとは考えていなかったのだが、ユーロ紙幣には、ヨーロッパの地図がデザインされているのだという。

ところが、この地図にカナリア諸島の一部の島々が抜けているというクレームが起き、更には、フランスの地図製作会社から「我が社の地図を無断使用している」という指摘も起きているのだという。

お札の地図から始まったこのことは、地図についての古くて新しい重要なテーマである。

その一つ「領土と地図」、これは日本の竹島や北方領土で起きている問題でもある。当該の島や地域の帰属は、いつの時代の地図に、どのように表現されていたかが決め手になる。あるいは、地図の上で正しい表記をすることで、主張の一貫性を維持することにもなる。政府の作る地図から自国の領土が欠落し、地名が誤って記入されることは許されないのだ。「日本海」を巡る日本と韓国などとの問題もこのような、それぞれの国の主張の延長上にある。

「地図の著作権」のことも、難しい問題である。日本の法律は、地図に著作性があり、著作権が存在することを認めてはいるものの、「地図とは、地上の状態を一定の規則の下で、正確に表現したものである」からこそ、大縮尺にな

るほど、誰が作成しても似たようなものができる。また、できなければならない。

そして、世界には官が作る地図に公共性を認め無償提供する国と、地図は軍事機密であるから公開も一部に限定して、しかも有償提供する国とが混在しているが、どちらが良いかは一概に言えない。いずれの国でも地図に著作権が存在することは同じだが、官が国民サービスのために道路や公共施設と同様に地図という情報インフラを無償提供することが、かえって多くの場面では地図の著作権をないがしろにする風潮を作り出すこともある。末端の利用者に、地図は無償であるという先入観を与えるからだ。

一方は、有償提供の世界では、地図の自由な流通がやや不足し、かつ高価なものになり、市民サービスが低下する傾向がある。

おっとと、ちょっと真剣に考えてしまいました。が、私的な手作り地図ならどんな島を描いても、島や海に怪しげな名前を付けてもとやかく言われる心配はない。

そんな地図を描く”やまちゃん”は日本でも、このように地図が印刷された１万円札、モザイク模様の地図切手が早く出回ることを期待している。

「『Cambridge』の地図」

毎年、春は病を抱えて迎える。

胸が痛み、頭痛がひどいときもある、ある5月はひどい耳鳴りが続いた。何週間かは我慢するが、堪えきれずに医師を訪ねる。24 時間心電図を記録し、レントゲンや CT をとることもある。医師の言葉は概ね「診察の結果は、特に悪いところはありませんね」となる。その瞬間から、痛みは和らぐ。毎度、発病から治癒までにおおよそ一月半を要する。

5月病である。

赤門をくぐったことも無い”やまちゃん”には、正統といえる五月病は知らないが、自分なりの五月病だと分かったのは、何年かの後であった。

ところが、ここ数年は、この病に罹らない。

訳は簡単であって、老いが肉体的な病を連れてきたからだ。足が、腰が痛いというもの。

ところが、今年の春は新しい病がやってきた。毎日がつらい。

“やまちゃん”は長距離通勤をしている。仕事のために？何とか体力を温存しようと朝夕の通勤は座りたいと考えているから、ごく自然に、朝、家を出る時間は早くなる。

都心の乗換駅構内にある大きな書店は、早朝からそうした時間調節の通勤客であふれている。

心地よいバックグラウンドミュージックの下で、好きな本のサーフインをする瞬間は、時間を忘れる。いや刻を忘れている。

本を買い求めて、あるいは立ち読みをして書

店を出ると、これから長時間の勤務が待っている現実に帰る。快感の引き換えとなる、その気分の悪さといったら無い。

それはともかく、その書店で気になる本を見つけた。

「村上春樹全作品 1990-2000」（講談社）というものだ。値段は2500円。

悪気は無いが、村上春樹氏とその作品には、何の興味も無い。

厚手のブックカバーから取り出してはみたが、ページはめくらない。

「装幀は和田誠か、買おうかな」手にとっては迷っている。

そんな日が、何日も続いた。

その本のブックカバーは、小窓のようにくり抜かれている。

小さな四角からは、「Cambridge」の地図が見える。もちろん、本冊の表紙は地図でできている。

悩める病が続いたある日。購入を決断したとたん、今年の五月病は治癒した。

そうだ、彼の「ノルウエイの森」（講談社）には、「卒業後は国土地理院で働きたい」という地理学専攻の学生がいて、主人公が「・・・確かに地図作りに興味を持った人間が少しぐらいいないことにはーあんまりいっぱいいる必要もないけれどーそれは困ったことになってしまう」、という件があることを思い出したからだ。

その書籍は表紙を向けて書架の中央に位置しているが、未だ読まれていない。

「九十九」

「日本は島国だといわれますが、いくつの島から成っているのですか。」

常から質問を受けることが多い”やまちゃん”には、こんな質問も寄せられる。

答えの前に、島の定義について確認しておきます。

「領海及び接続水域に関する条約」では、「自然に形成された陸地であって水に囲まれ、高潮時においても水面上にあるものをいう」と書かれているとのこと。だから、太平洋上に人工的に島を作り、領土とし、その周辺を自国の領海とするといったことは、国際法上認められないのだそうです。

そのほか一般的には、「水で完全に囲まれた陸地の一つ」（国連海洋法条約 121 条）、「周囲を海、湖などの水域で完全に囲まれた陸地」などと定義され、一般にはグリーンランドより小さいものを島というのだとか。

そろそろ、本題の「日本にはいくつの島があるのでしょうか」に明確にお答えしたいのですが、島の定義、特に小さな方の決まりに左右されます。

面積 1 平方 km 以上の島の数なら、･･･全国で 340 あるというのが一つの答え。

日本沿岸における外周 0.1ｋｍ以上の島の数はというと、6,852 島というのが二つ目の答え。その時、日本で一番島の数が多い県は長崎県の 971 島、次いで鹿児島県が 605 島、北海道が 508 島となっている（海上保安庁海洋情報部調べ）。

さらに、人が住んでいる島の数となると、少々古いデータですが「日本島嶼一覧（昭和57年)」によれば425島だとか。

ところで、狭い海域にたくさんの島があることで有名な長崎県の九十九島。実際にはいくつの島があるのでしょうか。こんな疑問に答える「九十九島の数調査研究会」なるものが地元にあり。そこが調べたところ、ここだけで 208の島が確認されたという（ただし、ここでの島の定義は満潮時に水面上にあるものすべて)。名称の九十九より多い島数があることになった。

ということで、この定義なら「日本の島の数調査研究会」なるものでも組織しなければ、とても日本の島の正確な数は分からないことになる。

話は、島から浜に移るが、千葉県の房総半島の九十九里浜。太平洋に面した砂浜が弓なりに連なるにところ。それでは、この九十九里海岸は、九十九里あるのだろうか。

地図上では約60kmあるが。

１里＝約4.0ｋｍとすると、とても九十九里は無い。ところが、ある時期の１里＝約0.6ｋｍであったから、過去の長さの単位では九十九里あったということになる。

うーん、それでは、九十九谷（千葉県）は、そして九十九曲川（茨城県)、九十九曲峠（高知県・愛媛県）などはどうなるのだろうか、真実のところは皆さんに確認していたくことにしょう。

読者の皆様には、もうお分かりのように「九十九」は、概して「たくさんある」「大変長い」

などを意味しているのであって、実数を示しているのではない。

　それなら、「百」ならどうかというと、百人町（東京）、百人浜（北海道）、百万遍（京都）などは、百人同心に支給された地、百人が遭難した浜、百万回唱えた地などに由来していているのだとか。関連して白里、白浜、白潟などは、「白寿」の祝いと同様に「百ひく一」、「九十九」と同じような意味を示しているものもあるのだとか。

　同じように、Ｊリーグでおなじみの日本サッカー協会の旗章にある、足でサッカーボールを押さえる三本足のカラス、「八咫烏（やたがらす）」の八咫も、８×１８センチのからす（咫：親指と人差し指を広げたときの長さ）というわけでもなく、非常に大きいという意味。もちろん、大江戸八百八町、京都八百八寺、大阪八百八橋も、うそ八百とは言わないが、その類のもの。

**「道の発達」**

お年を召した”やまちゃん”は、夏でもエアコンを控えている。

なぜかと問われても、「ただなんとなく老体には悪そう」といった程度のことである。

そこで、暑さしのぎに、せめて話の内容だけでも雪景色を取り上げることにする。

青春の一時期を札幌の町で暮らした。そして、30 数年後再び札幌で住まいすることになった。

長い空白があったが、町の様子はあらかた分かったし、新たな場所を訪問するとしても迷うことは少なかった。それというのも、札幌の道路網が碁盤の目のようになっていて、住所を言えば創成川と大通り公園の交差地点を原点とする座標軸で表現されることが理解を助けるからである。その札幌が、明治初期からアメリカ人ケプロンなどの技術者の指導で街作りを進めたことは、有名である。

それ以前、同様の例は京都と奈良ぐらいであろう。

それはともかく、自然発生的な道はどうして、あんなにも不自然に曲がるのだろうか、それを考えると眠れなくなってしまいそうであるが、その理由を”やまちゃん”は知っている。

それは、再訪した札幌の住宅のベランダから見えた、通勤者の歩く風景から解明できた（”やまちゃん”、高いところから眺めるのが好き？）。そこには、大きな四角形の空き地があって、対角線上に進むと駅までの道は最短となる。

ところが、通勤者の通る道は微妙に曲がりく

ねっているし、春から秋までの道筋は更に微妙に変化する。

その原因は、降雪後に始まる小道の発生からの経過を見ると明らかになる。

空き地が根雪になると、これまでの小道の情報はクリアされる。

大雪なら誰もが除雪された車道か歩道を進むが、いつしか挑戦者（子供や若者）が空き地を横切る小道を造る。最短の対角線を目指すのだろうが、挑戦者のそれは微妙に曲がる。次に歩く者は前者の跡を慎重に歩く。だが、対向者が現れると、すれ違うため踏み跡を広げざるを得ない。そうこうするうちに、小道は蛇玉の（蛇が獲物を飲み込んだ）ように広げられ、次第に左右に曲がる。きっかり、直線的に作り直そうなどと考えるものはいない。

より負担の少ない筋を通る。その後、雪が積もる融けるを繰り返すごとに、小さな地形の変化や雪の高まり、水たまりや行きかう人を避けて道は形づけられる。雪解けを迎えるまでには、ゴビ砂漠の涸れ川のように道は動く。

住民や役人の手で改修が行われない限り、道はこのように発達するのだと”やまちゃん”古い地図を見ながら納得している。

もちろん、ことの真相は定かでないから、この話は、指先がしびれるような雪解け水に流していただきたい。

「位置を知る」

1年を経て、そろそろ皆さんからの”やまちゃん”像も、すっかり出来上がったころでしょう。そうした期待を裏切ることなく、もう少しがんばらなければならない。
そんな”やまちゃん”が苦闘する傍らの書棚には、過去10数年ほどの地図にまつわるスクラップがある。

過去10数年といっても、それほどのボリュームはない。”やまちゃん”は移り気だから、切り取っては休む、思い出しては集めるという風である。それも、引越しの度に捨てられそうになりながら、残ったものである。結果は、小ぶりの書棚一杯分である。
収集されたスクラップは、常時開かれるというより、切り抜きすると同時に要所が蛍光ペンでマーキングされ、キーワードが頭の片隅に入れられた後は、時折読まれることがあるといったことで、すべてが役立つわけでもなく、その一部が時には日の目を見るといった程度のものである。

そうしたスクラップの中に、世界最大級という大きなモスクで祈りを捧げる、敬虔なイスラムの人たちの写真がある。
信者達は、ただ一心にメッカの方向を向いて祈るのだろうが、建物の中で妙に整然と並んでいるのが気がかりであった。

年始や年度始めの社長訓示などで集められた社員は、なんの操作もしなければ整然と並ぶことは無い。ソーム課長の指示で並ぶとしても、極めて整然にとは行かない。

それにしても　モスクのそれは素晴らしい。イスラムの人のために用意されたホテルの床には、メッカの方向を示す目印がついているそうだが、彼らは、配置された目印により、あるいは足下のタイルの模様などを参考に位置しているのだろうか。

　地図や測量の基本は、地球上の自分の位置を知ること、指定された場所に正しく位置することである。GPS が発達した今では、それがかなりたやすいことになった。まもなく私たちは、GPS つき携帯電話一つで、それも数センチの精度で所定の場所に位置することができる。時には、室内や地下街ですらそれも可能になる。そのとき人は、ソーム課長の掛け声一つで、田の稲のように 50cm 間隔で立ち並ぶことができるかもしれない（体型が配慮されないから、直立できない箇所が出るかもしれないが、ともかく･･･）。

　こうした関連から、「なぜ、彼らは整然と位置することができるのか、確認してみたいものだ」という、それだけのことで、この写真はスクラップされた。

「沼と呼ばれたくない」

“やまちゃん”長距離通勤途中の書店のレジの近くで、有名書店が発行する本の紹介本を見つけた。無償である。しばらくこれが私の愛読書となった。

そこには、広範な書籍紹介や著者の随筆などがあって。”やまちゃん”にはすこぶる相性がよい。

ある日の、その書評誌に以下のようなフレーズがあった。

「･･･『あのね』と“みっちゃん”に話し、『ふーん、そうだったんだ』と言ってもらうことで心は収まるのでした。･･･」

この際、文意はどうでもいい。ここに登場した“みっちゃん”が懐かしい。

“やまちゃん”過去にそう呼ばれていた。

いや正確には、今でも、何年ぶりかで再会する年を召した兄や姉からそう呼ばれている。

東北出身者が多かった”やまちゃん”の故郷のご近所では、「おかあ」、「おどう」と呼ぶ家庭が多かった。もちろん父母のことである。その中で、関東から転居してきた”やまちゃん”ちは、「かあちゃん」「とうちゃん」と呼んでいた。

テレビが居間に位置するようになったころだろうか、姉たちが成人したころだろうか、誰からとも無く、「かあちゃん」はみっともないから止めにして、「かあさん」と呼ぼうということになった。

それでも“みっちゃん”には変更は無かった。

それっきり、還暦近くにもなる男は、兄姉た

ちから“みっちゃん”と呼ばれ続けている。

さて、本題の地図の話に戻さなければならない。

地図に表示される、湖・沼・池といった呼び名の違いはどのようになっているのだろうか。厳密に区分することは困難なのだが、地理学では、次のように区分している。

「湖とは、水深が大きく、植物の繁茂が湖岸に限られ、中央の深いところには沈水植物を見ないもの。　沼とは、湖より浅く、最深部まで沈水植物が繁茂するもの。 池とは、湖や沼より小さなものをいい、特に人工的に作ったもの（フォーレル(1841-1912)）。」と。

ところが、最近では特にイメージアップの面から、定義とは関係なく、水溜り全般に「〇〇湖」を使用する例が多くみられる。同様なことは「〇〇高原」などにもある。

地図に表現されるには、地理的な定義よりも、呼称について、市民権を得られることが必要である。市民から、そう呼ばれること、名称から場所が特定できれば良いということ。

水深が浅くて、葦などが繁茂しているのだが、「沼」と呼びたくない人たちの操作で、「湖」と呼ばれる。

思慮深く、髪も繁茂していない、“みっちゃん”の場合はどうなるのだろうか。

**「秘密の地図」**

ある日、電車の中での若い女性の会話に聞き耳を立てた。

一人がお勧めの店を紹介しているのだろうか、目的地までの道筋を丹念に説明している。

「あのね、山手線の内回りのホームを降りるとね、真ん中の階段を浦和方向に上ってね、それから右、下谷口方向に進むとね・・・」

「ちょっと待って、書き留めるから」聞き手がバックから手帳を取り出す。

「書くほどのことはないのに」

「いや、後で考えるのいやだから」といいながら書き出した。”やまちゃん”ずうずうしく手帳を盗み見て、びっくり。

「山手線の内回りのホーム→　真ん中の階段を浦和方向に上る→　右、下谷口方向に進む→オレンジキオスクの脇を左に→　・・・」と横書きに書き出したからだ。

共通の体験をもとに、複数の者にある目的地のまで地図を書いてもらうと、当然ながら各人各様のものができる。もちろんそれは、紙状のものに吐き出す以前の頭脳の地図がそれぞれ異なるからである。

メモする女性はその場所での実体験が無いから、地上を思い浮かべることは難しかったのかもしれないし、ドイツなどからの帰国子女だったのかもしれない？（彼女の書いたそれは、聞くところによるヨーロッパスタイルのカーナビゲーションのようであったから）。

それはともかく、紙などの媒体の地図を持たない動物は、頭脳の中にそれぞれの怪しげな地

図を持っているはずである。

その、動物たちの怪しげな地図の話だが。ハイイロハシブトカラスは、秋になると約3万個のマツの実を数千箇所に隠し、それを春までに全部探し出して食べてしまうのだという。

そこでの地図は、いくら特異なものであっても、餌を探し出すという目的を立派に達成している。同様な例は、人間も含めた他の動物たちにもいえることである。頭の中の地図は、個々が理解できれば、どのように書かれていても良いのである。（彼女も同じ）。

だから、ハイイロハシブトカラス同士であっても、頭脳の情報の共有はできていないように、勝手に書かれた地図は、他人には読み取れないものであるはずだが、地図の定義は「地表の状態を一定の規則で表現したもの」であるから、これを作成すれば、いくら「マル秘」扱いにしたところで、それは守れない。

戦時中の一時期、地図は「極秘」の扱いとなり、真実を描いたものは秘匿された。市中に出回ったものには、軍事上重要な施設が田んぼや畑になり、他の建築物で埋められカモフラージュされ、公開された。空中写真ネガの該当地域には墨が塗られた（焼き付けられたとき真っ白になった）。それは、要塞地帯を走る列車の窓にブラインドを下ろさせたのと同様で、重要施設の存在を暗に知らせていることになる。

そのような意味で、本来地図を作るという行為は、秘密の存在を無にすることかもしれない。

幸い、現在の日本では、地図はすべて公開されている。また、公開された空中写真には、駐留米軍の黒い戦闘機もさえも写っている。もち

ろん、偵察衛星の時代だから地図を非公開にしても無意味な時代ではある。

　しかし、隣国を含め詳細な地図は非公開、国外持ち出し禁止の国がまだまだ多い。

**「悪党どもが見る越前屋の地図」**

時期はずれの紹介になったのだが、12 月 14 日まで東京国立博物館で、「伊能忠敬と日本図」という催し物が開催されている。

ここでのメインは、もちろん「伊能図」。それも「大図」と呼ばれる縮尺 1/36,000 という大きなものである。今回は、アメリカで新たに発見されたものをディジタルデータで入手・出力し、彩色したものを床展示している。全国分 200 枚を一挙公開する広いスペースはないから。関東・中部地域だけの展示である。

手前味噌だが、北九州市の当社「地図の資料館」なら、「中図」ではあるが日本全域が床展示されている。

ところで、こうした大ぶりの日本地図の床展示を見て違和感がないのはどうしてだろう。

本来日本の地図は、大広間に広げて四方から見たものである。時代劇で悪党どもが忍び込む屋敷の地図、戦国武士が戦の場所の地図を広げている風景である。

壁展示の東京国立博物館所蔵の「大図」やその他の古地図を含めて、「注記」と呼ばれる文字類や島や山岳の景色も四方八方の向きになっている。どこから見ても、どこに置いても良いもの、不都合なものは体の位置を変えるか、地図をどうにでも回転させればいいのである。少なくとも、文字や景色の全てが読めないということにはならない。地図も、タタミ文化の延長にあるということ。

翻って、街中で良く見かける案内図には、時折向きが不適切なものがある。掲げた方向と実

際の地形が合わないからである。地図を作り、文字列を並べる以前に掲示場所や、その向きを頭に入れないと、旨くいかないのである。

“やまちゃん”、このことの解決策としては、地面に配置することが一つの方法であると思っているが、多くの実例に出合ったことはない。また、これはどこかで書いたことだが、不案内なことが多い老舗旅館や病院では、廊下に複数の線を引いた、「レントゲン室は赤い線のとおり進んで下さい」という、あの縮尺１／１の地図も良い。デザイン的には少々いけないし、病人のようにいつもうつむき加減で歩くわけにはいかないし、誰しも目的の方向が一緒ということもないからベターとはいかない。

ともかく、図柄も文字も北を向いた地図の出現で、西洋文化にかぶれた明治期以降の悪党どもは、たくさんの地図を複写しなければ、作戦が立たなくなったはずである。

ある読者の指摘と「世界の社会資本整備」（http://www.coara.or.jp/~tounai/inside/hanno.htm）HP によると、「ドイツ北部の大都市ハノーファーは、「緑のなかの大都市」と呼ばれ、中心市街地には歩道のうえに赤いラインがひいてあって、このラインに沿って歩いていくと市内の主な名所を一回りできるようになっている」とのこと。

**「地図の日向と風向き」**

皆さん明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。

と書いているのは、2003 年末のことです。

コラムの読者のことを考えると、気分は正月でなくてはなりません。何とか気持ちを高揚させて、とは思って見るのですが、普段は書き込みの少ない“やまちゃん”の手帳には、飲酒を伴う会合が、いくつか書き込まれていて、やや憂鬱です。

ともかく正月ですから、お年玉気分で明るくいきましょう。

“やまちゃん”、最近になってコラムと並行して「へー」と驚く「地図豆」を連載しています。その「地図豆」の全公開は、息の長いものですから、これを先取りした「お年玉」をお送りします。

地形図には、「地図の日向」「地図の時刻」「地図の風向き」があるということ。

「地図には、日向と日陰があるって、えー、ほんとー」という声が聞こえそうですが、本当です。

地図とは、「地上の様子を紙などに表現したもの」です。ですから、地上という立体的なものを、平面の中で何とか伝える工夫があります。その、立体感を表現するときには、影を利用します。陰影をつけるには、架空の太陽位置が存在しなければなりません。

その太陽位置は、ちょっと考えられない北西の位置にありますが、これが私たちにとって容

易に受け入れられる立体感を演出します。

また、地図記号には、影のついたものがあります。

記号のモデルになる実物も、陽が当たれば影ができそうなものばかりですが、その影はというと、いずれも下辺右側についています。真東に影があるとすると、夕方なのでしょうか、それにしては強い日差しのようです。そうなると地図の時刻は何時になるのでしょうか？。

さらに、地図記号の中で風に靡くものがあります、これも明確に右へ流れています。となると、西から強い風が吹いているのでしょうか。

ということで、地形図には、日の向き、時刻、風向き、そして季節も感じられます？。

読者には、質問の投げかけだけで、お年玉どころか消化不良でしょうが、正月休みのひととき、季節は何時なのかも含めて、こうした事象を証拠づける地図記号が何であるかなど、地形図を眺めてお考え下さい。

回答は、メルマガ連載の「地図豆」での登場を持って代えます。お楽しみに。

**「六本木ヒルズでは、迷って当たり前」**

北九州市リバーウオークを訪ねたときのこと。同所を管理するお偉いさんから、「ビル内で、目的地にたどり着かない者が多くいるので、ゼンリンさん分りやすい手持ちの案内図や案内表示に力を貸して欲しいのですが」ということが話題になった。

“やまちゃん”大いに同感であった。といっても理事長の地図作りに共感したわけではない。利用者の「迷うということ」にである。そして、2003.7.12「朝日」の辛酸なめ子氏の「みんなで迷えば怖くない」を思い出した。

「なめ子」さん、名前からして、これまでかなりつらい思いをしているのかと思うが、本題とは違うから、そのことは放っておいて。

六本木ヒルズについて、彼女曰く、「雲形定規で描かれたような（そこでの）地図は、皆目検討が付きません。・・・森タワーの側面は曲線で構成されており、どの角でまがるという目安の概念が通用しないのです。全体的に円形の回廊が多用されているので気づいたらグルグル回されて何周もしてしまいます。六本木ヒルズ・・・館内表示や配られている地図全て見づらく、誰もが迷子になる資本主義の迷宮です。」と。

「なめ子」氏は、迷うことに快感を持っているというから、これも放っておいて。

話題の六本木ヒルズには、“やまちゃん”も早々に足を運んだのだが、恥ずかしくも迷ったのである。そして、一般の利用者も然りであろうと思った。まさに、「なめ子」氏の観察どお

りである（それよりも、“やまちゃん”この街に楽しさを感じなかった）。

このことを、件の理事長に披露すると「福岡市のキャナルシティも含めて、設計者は、ジョン・ジャーディ氏であって、彼には、『この、曲がりの先に何があるのだろ』という想像する楽しさを体現しているの」のだという。

“やまちゃん”、このことは以前から発言していることで、「お節介商品が氾濫する現代は『この、先に何があるのだろうか』という楽しさを味合うことができない。そのことが。すさんだ世を作っている遠因である」と。したがって、『この先に何があるのだろうか』には、大いに賛同する。しかし、それを実現する手段には賛成しかねる。

これは、地図の問題ではない。建築（都市計画）設計上の問題である、誰しもがそうだとは断定できないが、人は 90 度の倍数以外の角度を正しく認知できない。いわゆる方向音痴の女性？は、角を三回通過すると空間位置が不確かになる。

ましてや、この曲線で構成される町では、さらに混乱する。

「最初に右へ 60 度曲がり 20m 進み、次に左へ 45 度曲がり 20m 進んだとき」、元の位置に対してどのように位置しているかを、瞬時に判断できる人などいないに等しい。と、“やまちゃん”は思っている。

まして、傾斜地に位置する六本木ヒルズでは、継ぎ足しされた温泉旅館と同様に、立体ジクソーのようにさらに空間認知を困難にさせている。楽しいはずの買い物を、苦しくさせている

と思うのだが。
「今日も、六本木ヒルズを訪れる人は多い」

## 「地図の“向き”」

今日のテーマは少々堅い「地図の“向き”」についての話だ。

現在は、身の回りの地図のほとんどが、向かって上が北となっている。

果たして、いつからそうなったのだろうか。

識者の言葉を借りれば、“地図の向き”は、人間の行動や機械の発展と関係が深いことが知られているという。原始、人間は自然中心の生活をしてきた。狩猟をし、果実などを採取することで暮らしてきたから、自然発生的に、これらに関連した情報を伝える手段として地図が出現したのであろう。

そのときの地図の向きはというと、当然ながら彼らの行動や思考と深く関連していて、重要な目標物を特定の場所に置いたはずである。

それは、私たちが描く略地図と同様であって、自分中心であり、それぞれが心象に残った山や川（ランドマーク）を基準とした向きになったはずである。ところが、時代が進むと太陽や山岳などの自然崇拝が起きる。こうなるとランドマークが共有化され、そのことで“地図の向き”も一定の方向になる。例えば、神殿や城郭がランドマークとなるのであるが、これをどう配置するだろうか。

民衆が神殿を崇めるように、街の中央や特定の位置に神殿が配置されるのはごく自然のことである。神殿から民衆を支配するように、神殿が民衆の中央に配置され、高まりに位置するのも普通である。地図においても同じ、紙の特定の場所に位置することになる。

その後、羅針盤の発見とともに探検の時代がやってくる。その時の地図の向きは基準とする北が上を向き、地図に記される文字の向きさえもそれに従った。こうしてしばらくは、地図に人間が従属した。と、”やまちゃん”は思っている。

それでは、北を上とした「地図を上手に読む」ということは、どのようなことだろうか。

地図から想像すること、あるいは人に地図を従属させることである。一般的には読み手の座標軸に、「北を上とした地図」を合わせること、回転させることである。

重ねていうが、原始、私たちがそうであったように、それぞれのランドマークは、獲物の居る山であり、果実の採れる森であり、単にそれを基準にさらなる目標物が描かれていた。その中から読み取れる風景を想像して使う、工夫して使う、そして回転して使うことが地図を旨く使うコツである。

それを実現したのが、カーナビゲーションである。

カーナビゲーションの地図。それは、おせっかい商品らしく「想像して使う」は欠如しているが、「人に従属して回転する地図である」というのが、カーナビゲーションの地図と人との主従関係である。

ところが、長いこと訓練され、馴らされた”やまちゃん”の頭の座標軸には、いつも北が頭のどこかに固定されてある。進行方向に沿って自然に回転する地図を目の当たりにして、これを更に回転して、今、東南に向かっているのだから？熊本はこっちなどと、紙地図を併用して

苦闘している。”やまちゃん”は時代から取り
残された。

**「道を尋ねられ易い人」**

冬日のころ、薄暮の田舎道で訪問先の居宅が分らなくて、往生したことが有る。

夕暮れが暗闇になり、曲がりくねった先の見えない道が不安を強くする。

「向こうから人が来るよ。止めてとめて！」同乗者が言った。

「すみませーん・・・」

“やまちゃん”車を寄せ、声を掛けてから、・・・先が続かなかった。

暗がりから振り返った顔は、明らかに外国人。中近東の人だろうか、ともかくそちらの方向の人々だったので、次の言葉は飲み込んで、「すみませんでした」といって、車を出してしまった。

世の中には、「道を尋ねられ易い人」がいるらしい。

通勤の道すがらは勿論のこと、見知らぬ町を散策中であっても、旅行鞄を下げた旅行中であっても、声を掛けられるのだそうだ。このときの「道を尋ねられ易い人」へのアタックは、話し掛けやすい優しい顔が見える前方からだと思うがどうだろうか。

背中から、「優しい顔」が見えないから、後ろからも声を掛けられるのだとすれば、「話し掛けやすい」が、体全体からにじみ出るような奇特な人ということになる。

件の「道を尋ねられ易い人」は、外国旅行中も例外ではないそうだから、イラン人の例は、これに当たるのかな？

どこから見ても堅物に見える”やまちゃん”

には、何とも羨ましい限りである。

さて、問題解決のためには、付近の地理に詳しく、説明上手な人を探し当てて、声を掛けなくてはならないが、見るからにそのような人になどに、お目にかかったことは無い。

行動パターンとしては、交番などの地図のあるところ、地理案内を仕事にしているところ。あるいは、昔ならタバコ屋のおばちゃんなど、時間もあり、それなりに地理的知識や説明経験がありそうなところなどを選んで聞き取りをするのがオーソドックスなところである。ところが、最近は無人交番も多く、昔のタバコ屋に代わる店番を置く商店も見当たらない。だから、この問題の解決には、誰でもが「話し掛けやすい人」、「地理知識の高い人」になるといいのだが。

「誰でもが地理の説明上手な人」になるには、それなりの教育が必要になる。”やまちゃん”の「出番だ！」と思ったものの、説明上手になるコツについては、よく把握できていない。

**「地図の読める人が国を良くする！」**

“やまちゃん”の顔の一つに新入社員などへの地図の先生というのがある。

ここでの第一声は、「地図の読める人になろう」というものだ。

その意味するものの最初のひとつは、当然ながら地図記号などの約束事を知って文字通り地図が理解できる人になること。

ふたつ目のそれは、地図から現地が想像できる人になることだ。地図は一定の約束事に沿って作られたものだから、それを読むことで知らない街の風景や地形が想像できるはずである。それができる人になることで、初めて見知らぬ風景を想像できる地図を作れる人になれるというものだ。

さて、最後の「地図の読める人になろう」は、ある意味で地図だけの人にはならないこと、視野の広い人になることである。

その、「地図の読める人」が、日本にたくさん欲しいという話である。

かつては日本最大級といわれたホームセンターが、“やまちゃん”の住む町の近くにある。

その行き帰りに通る交差点の一部が近ごろ改修された。ごく小さな道を除けば、改修前は平面交叉の六叉路で渋滞の名所でもあった。その交差点の東西を結ぶ道が拡張され立体交差になったのだ。ところが、交通量の推定を誤ったのか、それとも設計が悪いのか、一向に混雑は緩和されていない。

その理由の一つは、立体になった東西の交通

量が（今のところ）少ないことでその恩恵を受けるものが少ないこと。平面交差そのものを利用する車線数が減少したこと。

六叉路が依然そのままであることで視界が悪くなり、信号が複雑になったことなどが考えられる。

残念ながら、日本には旧市街地に対する大胆な都市計画というものが見えない。

比較にもならないが、「ナポレオン 3 世の下で、パリ大改造を担当したオスマンは、当初なによりもまず厳密な測量に基づく地図が必要だと思ったそうである。彼から指示されたデシャンは、直ちにパリ市全域の三角測量を行い、正確な 1/5,000 地図 21 枚を迅速に作成し、この期待に応えた。そして、知事執務室に置かれたこの地図をもとに、パリ改造計画が策定されたのだという」（「怪帝ナポレオン三世」鹿島茂著）。

その結果は、歴史的建造物は残しながら 20 世紀、21 世紀に受け入れられるパリが造られたのである。

明治初期の日本でも、お雇い外国人技術者の下、三角測量と地図作成が行われ、日本の未来計画が立案されようとした。太平洋戦争後の日本もその主旨は多少異なるものの、米軍による日本全土の空中写真撮影と地形図修正が行われ、焦土は新しい日本となる可能性を秘めていた。が、計画と実行がひとたび日本人の手にかかると、夢は小さなものになる。後に評価されたのは、名古屋市における 100m 道路など、わずかなものである。

なぜ、日本人に計画的な街づくり、特に市街

地の再開発はできないのか。

　あの交差点での誤りに象徴されている。根本的な混雑解消のひとつは、六叉路を 4 叉路にする交差点の単純化である。それには、少しだけ広い視野を持って交差点付近の改造が必要だったということ、そのためには種々の意味で「地図の読める人」が必要だと“やまちゃん”は思っている。

**「地図と花とシーボルト」**

“やまちゃん”の母は健在である。

彼女は、93歳で北の街で一人暮らしである。

そして、彼女の庭は、雪解けの春からナナカマドが真っ赤に色づく初冬まで、花で溢れているはずである。

その母が花を愛でるようになったのは、行商の仕事から手を引いた後半生からである。それ以前、我が家には父の咲かせる花があった。家庭菜園の傍らに、菊やダリアのような多年や宿根の草花類があった。

そんな影響を受けたのであろう、花好きである。

そして、もちろん地図が好きである。

花のことでは、人との係わりは少ないが、地図･測量のことでは、これまで多くの人に支えられて、私が育てられてきた。感謝の気持ちを、何かで恩返ししたいと願っている。

常から、地図や測量が好きな人に手助けをしたいと思っている。地図を作る人、測量をする人の理解者を増やしたい。「地図の楽しさを伝える人」になることが夢である。地図・測量に関わる小文を書くことも、その経過の一つである。

さて、地図・測量の流れで資料をめくると、出島にいたケンペル、ツュンベルク、シーボルトがいる。

シーボルトは、日本の近代地図を紹介した。そして、それ以前にはケンペルが日本を紹介し、日本を地図にしている。

彼らは、行動制限の大きい悪条件下にあって、

いずれも熱心に、日本及び日本人の調査と研究に従事した。言葉はもちろんのこと社会習慣も大きく異なるなど未知の世界で、ツンペリーはケンペルを、シーボルトはケンペルとツュンベルクの方法に学んで、より総合的に日本を知ることに取り組んだ。

その時、彼らは多くの植物とその種子類を持ち帰った。

もちろんのこと博物学という学問のためもあるが、そのころからすでに、価値の高い香辛料入手の延長としての、種子戦略を展開していたのであろう。

ともあれ、ケンペルはウメ、ヤマブキ、シュウカイドウ、サザンカ、ハナショウブ、ツバキなどを欧州に紹介し、あるものには学名を与えたという。シーボルトも同様に、テッセン、そしてウツギ、アジサイ、ウメなどに学名を与えたという。ツュンベルクもまたしかりである。そして出島には、立派な植物園もあった。

地図・測量とともに草花との繋がり大いに感じられる。

たったそれだけのことが、地図測量と関わる”やまちゃん”には心の支えである。

**「匂いの地図」**

ある者は「匂い喪失の時代」を憂いている。

「匂いを失うことによって、人の心は優しさや温もりを失い、人間関係が冷たく、荒んだものになっている。」と「失われた『匂い』を求めて」の中で、安立博氏は、「匂い喪失の時代」を憂いている。

また、人類の発達により、知性の座が著しく大きくなり‥‥しだいに視覚優位の時代になっていき‥‥知性偏重の文化になり、そこで失うものは大きいのだそうだ。

少々難しいが、消しゴムの匂い、クレヨンの匂いといった、ふとした匂いによって、埋もれていた過去が甦ってくることがあるが、匂いを失うことでこのような、過去の時間、生きた歴史を失うことになるのかもしれない。

匂いについて、こんなにも思い入れるのには、理由がある。

“やまちゃん”は、無臭症である。無臭症であったというのが正しいかもしれない。

今はかなり回復したが、一時はカレーの匂いも感じなかった。前にも書いた5月病が果てしない延長戦のように続いて、専門医の診断を受けたが完治しなかった。

匂いを発するのであろう液体を、注射針から腕に注入され、「何か匂いますか。どんな匂いですか」と看護婦さんに尋ねられたが、何の反応も無かった。

治療は、何ヶ月か行われた。仰向けになって、匂いの神経を刺激するのであろう薬を鼻に注入し、「じっと我慢の子」をするのだが、明ら

かに分かるような回復はなかった。回復の兆しも無く、半年も経過したころ、主治医から「このままもう少し続けてみますか。それともしばらく休みますか」という自信のなさそうな問いかけに、治療を断念した。

その時の匂いの喪失は、直接的には食欲に影響した。触れる前に感じる。食する前に想像することが無くなる。正に視覚が優位になる。想像する機会が少なくなる。見る間でもなく、予想し形作ることができなくなる。

ところが、数年後のある日から次第に回復し、今では8割方元に戻ったようである。

そんな、ある日の新聞に「匂いの地図」を見た。（森憲作東大教授： 2003.3.29朝日）

匂いと脳の反応を地図化したものである。

匂いを識別するメカニズムは、つい最近まで分からなかったことが多かったが、人の匂いセンサーは、347種あるのだという。一方、匂い分子は40万種あるから一対一の組み合わせではすべてを感じ取ることはできない。実際には、匂いセンサーはバーコード的な仕組みを持っていて、一つの匂い分子に対して複数の匂いセンサーが結合する。このような匂いセンサーと匂い分子との組み合わせで40万種の匂いが識別できるのだという。

組み合わされた匂いの情報は、神経細胞を経て嗅球という場所にある糸球体というものを経て大脳に伝えられる。この匂い分子をかいだときの嗅球上の反応分布図が「匂いの地図」である。

ただそれだけのことではあるが、”やまちゃん”には大切な情報である。

**「東京でも、無人島でも使える地図」**

今回の話題は、”やまちゃん”の普段の行いからすると、もっとも遠いジャンルの話題だ？

女性週刊誌や芸能番組の話題に、「抱かれたくないタレント」というのがあり、名誉あるNo.1 には、例年のように「D」の名が上がる。一般論として反論しておくと、何も大多数の女性に抱かれたいと思われる必要はないのであって、赤い糸で結ばれた人にめぐり合い、その人にさえ愛されればよいのである（最も、Dはそうは思っていないかもしれないが？）。

さらに、不謹慎な話であるが、ある女性達は、男性を次の３つのグループに分けるのだという。

「東京にいて寝ていい男」

「無人島に二人だけで流されたら寝てもいい男」

「無人島に二人だけで流されても寝たくない男」

当然、Dはどこにいても寝たくない男なのだが、「東京にいても、無人島にいても、日が落ちれば寝てしまう」”やまちゃん”には、この手のことは、もうよく分らなくなった。

では、「東京でだけ使いたい地図」「無人島でなら使ってもよい地図」「無人島でも使いたくない地図」はどうなるか。

「東京でだけ使いたい地図」はというと、グルメスポットやショッピング情報などのコンテンツが満載されている。高層ビルの片隅にある小さな公園の緑が強調され、縦横無尽の交通網やモグラの巣よりも無計画に作られた地下

街の表示にも工夫があり、お金で買える都市の情報は満載である。しかし、等高線を含めた地形表現は貧弱であってもよい。

「無人島でなら使ってもよい地図」は、もしもの時には、テント代わりや折りたたむとコップにもなる雨風に耐える強い紙で出来ていている。紙ではないにしろ、情報から自然が読み取れ、楽しい風景が想像できることで、希望がわいてくるような、お金では買えないことへの表現が豊富なすぐれモノ。

う一ん、「無人島でも使いたくない地図」については、“やまちゃんは”話したくもないが、紙質が悪く、もしものときの拭き紙にも使えないもの。掲載範囲が悪く、見たいところが見えない。地図上に示された情報から現地位置の特定が難しいほか、一見、情報で満ち満ちているが、良い情報が少なく、よく読むとノイズばかりで、情報表現が薄い、絵に近いモノ。

君は、どの男を選ぶか。いや地図を選ぶか。

え！”やまちゃん”はアナログの地図しか相手にしていないのかな。